

1 事業名称等

- (1) 事業名称 文化財建造物を活用したまちづくりの「縁側」づくり
- (2) 実施団体 地域人文化学研究所
- (3) 事業経費 1,201,580 円

2 事業の目的

(1) 事業の背景

足助の町並みは、平成 23 年度に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、補助制度による建造物の修理・修景が徐々に進んでいる。しかしその一方で、空き家や倉庫代わりに使われている低利用の建物が約 70 棟あり、その他にも高齢化等の所有者の諸事情により積極的な保全が図られていない建造物もある。

当研究所では、町並みの保存・活用に関わる課題等の解決に資するため、伝統的建造物群保存地区内に所在する空き家を借り受け、昨年度からワークショップ形式による修繕を行うなど、まちづくり活動を展開してきた。本事業による管理活用の対象としたのも、その空き家「寿ゞ家(すゞや)」である。

寿ゞ家は、町並みのほぼ中央部に位置する元料亭で、大正 13 年築の木造瓦葺 3 階建て（地下 1 階地上 2 階）の本館（特定物件）と、昭和 32 年築の木造瓦葺 2 階建ての新館及び付属建物から構成され、大広間を含む座敷 7 室・茶室 1 室など大小約 20 の部屋があり、延べ床面積は約 300 m²を測る。本館北面が「中通り」、本館から新館東面が「地蔵小路」に面しており、それぞれに独特の景観を形作っている。

(2) 事業の目的

本事業では、寿ゞ家をまちづくり活動に関連するヒト・モノ・コトの様々な「縁」を結ぶ装置「まちの縁側」として活用するため、次に掲げる事柄を事業の目的とした。

- ①所有者等に代わる管理活用方法の構築
- ②文化財建造物の適切な公開活用手法の検討
- ③管理活用のための事業企画及び事業化の能力向上
- ④他の活動主体や地域住民のネットワークの構築

3 事業活動の内容

(1) 建物修繕と交流の場づくり

- ①建物修繕：開閉できなくなっていた本館 2 階の窓の調整、傾斜が急な本館の階段への手すりの取り付け、モルタル外装部分の修繕等を実施
- ②室内空間整備：建物内部の公開活用のために、不要残置物の処分や傷みが激しかった部分の畳替えを行い、襖絵等の保全について専門家からの指導を受けた。
- ③景観整備：周辺住民や来訪者が寿ゞ家の外観を含む町並み景観を楽しめるように、地蔵小路及び本館北側の庭（北庭）等の植栽整備を行った。玄関前の門を常時開放して整備後の北庭をいつでも入れる場所とし、地蔵小路と共にまち歩きを楽しむ魅力向上を図った。
- ④交流会の実施：地元住民の有志等、まちづくりに関心のある人たちの交流会を実施した。

(2) 定期的な管理人の配置

これまで当研究所の活動日には寿ゞ家内部の見学を受け入れていたが、その他の日は管理の都合上見学ができない状態であった。本事業では管理人を 1 名雇用し、主に活動日以外の土・日・祝日に、建物の日常管理作業と併せて内部見学対応を行った。

(3) 他の団体等との連携事業や観光行事に合わせた催事実施

コト（催事等）を起こすことにより、関連する他の主体とのネットワークの形成や、建物自体が持つ古さ・時代性を新しい価値につなぐ実験を行った。

- ①アートイベント「足助ゴエンナーレ」の開催：他の主体と連携して実行委員会を組織し、寿ゞ家を会場としたアートイベントを開催し、建物自体の活用と新たな客層への町並みの魅力発信を行

った。

- ②「中馬のおひなさん」展示：町並み全体で行われる既存の観光イベント「中馬のおひなさん」の期間に合わせて寿々家内にもひな人形を展示し内部を公開した（土・日・祝日のみ）。

4 事業の成果

(1) 建物修繕と交流の場づくり

①建物の修繕

- ・大規模な修理ではなく、比較的簡単な修繕によって建物を維持する実例を示すことができた。
- ・建物の外観が変化（本館 2 階の雨戸が開いたことなど）により、活動がより見える化したため、周辺住民が作業中に声をかけてくれるなど、活動に関心を持つ住民が増えた。
- ・階段の手すりの取り付けにより、内部公開時の安全性が向上した。

②室内空間整備

- ・大量の不要残置物を処理できたことにより、内部空間の雰囲気と作業性の向上とともに、内部にバックヤードを用意することができ、建物活用の幅を広げることができた。
- ・畳替えにより活用できる場所の増加（2 室）し、活用時の安心感が向上した。
- ・専門家の助言を得て襖絵等の保全に関しても簡易な修繕方法の検討ができた。

③景観整備

- ・北庭を解放したことにより、建物の内と外との中間地帯が生まれ、建物に一步近づきやすい雰囲気演出することができた。
- ・以前よりも地蔵小路を通る人の数が増加し、まち歩きの回遊性が向上した。
- ・作業に際して、小路の占用許可など自治体の協力や、作業に地元の足助中学校 3 年生有志の参加を得ることができた。

④交流会の開催

- ・8 月 13 日に足助夏祭り花火の打ち上げを寿々家から眺める「花火鑑賞会」、9 月 9 日に同じく名月を眺める「月見の会」と称した交流会を開催した。
- ・花火鑑賞会はアートイベントの関係者を中心に参加があり、月見の会は地元住民の若手を中心に参加を呼びかけ、それぞれ 20 名程度の参加があった。
- ・かつて料亭として多数の人が出入りし、交歓する場であった寿々家の雰囲気が活かされた催しとなった。花火鑑賞会の参加者からは、「特別な場所から花火を眺められ、素敵な時間を過ごすことができた。」と感想があり、月見の会に参加した住民からは、「足助の町の中で気兼ねなく飲みながらの議論ができる場所が意外と少ない。こうした使い方ができる場所があったほうがおもしろい。」という評価もあった。

(2) 定期的な管理人の配置

- ①管理人配置期間：平成 26 年 8 月～平成 27 年 3 月の土・日・祝日、その他管理が必要な日

- ②雇用人数：1 人／日（管理人による管理実施日数 49 日（51 人））

- ③管理内容：建物の管理作業内容を一覧表にした「管理活用シート」を作成し、その項目に従って各管理日の作業を実施してもらった。また管理人には来訪者に対し、積極的に内部見学の対応を行うことを求め、周辺の住民から他の空き家情報など地元情報の収集や、市外からの来訪者に対し町並みの観光情報の提供を行うようにした。それらの活動については、「管理日誌」を用意し、実施した作業内容や来訪者から得られた情報等を記録するようにした。

④成果等

- ・来訪者の中には、料亭として営業していた当時の寿々家の思い出を持つ人たちも多く、建物や料理など当時の様子について教えていただくことができた。寿々家の内部が見られると聞いてわざわざ訪ねてきた方もあり、建物を介して過去の思い出を現在につなぐ機会を提供できた。
- ・まち歩きの際に建物の内部を気楽に見られる機会を設けたことで、外からは見えない足助の内側の魅力を発信することができた。
- ・単に見せるだけでなく管理人と来訪者が話すことにより、情報収集と提供が可能になるとともに、

来訪者の建物への親しみを増すことができた。対話により建物と人をつなぐ活動は、管理作業以上に管理人に期待する役割である。

- ・来訪者公開の頻度：主催する行事の開催期間を除き、曜日等を固定した週 1~2 回の定期的な公開が適当と思われる。管理作業は継続して行うことが望ましいが、来訪者対応については、来訪者の人数が不安定な現状では、それ以上の対応は難しいため。

(3) 他の団体等との連携事業や観光行事に合わせた催事実施

①アートイベント「足助ゴエンナーレ」の開催

i 実施期間：プレイベントを平成 26 年 8 月 13 日（水）・14 日（木）、メインイベントを平成 26 年 10 月 4 日（土）・5 日（日）・11 日（土）・12 日（日）・13 日（月・祝）の 5 日間で行った。

ii 実施体制：他の主体と共同で組織した「足助ゴエンナーレ実行委員会」により実施した。実行委員会スタッフ 9 名（うち足助在住 3 名、豊田市内 1 名、市外 5 名）、運営ボランティアスタッフ 8 名（うち足助在住 2 名、豊田市 3 名、市外 3 名）、出展作家 11 名・美術系学生 6 名・パフォーマンス 4 名、ワークショップ講師 2 名

iii 予算等：豊田市教育委員会の公募型アートプロジェクト「とよたデカスプロジェクト」に企画応募し、大賞受賞による賞金を担保に実施。本事業とは、管理人の配置と内部公開等の実証実験の機会として関連付けている。

iv 入場料：500 円/人、ワークショップ参加費は別途

v 関連事業：展示作家の作品と足助の和菓子職人の共同作業による創作和菓子「足助桃太郎」「足助菊次郎」の制作と販売等の実施

vi 成果等

- ・週末ごとに台風の通過があったが、メインイベント来場者数は 535 名を数えた。
- ・アンケート（配布数 500 枚・回収枚数 140 枚）による満足度調査では、大変良かった 84 枚、良かった 46 枚、普通 3 枚、あまりよくなかった 1 枚、良くなかった 0 枚、不明 6 枚で、自由記述欄には、「面白かった。」「建物とアートがマッチしていた。雰囲気がある。」等の意見があり、寿々家の内部空間の魅力を効果的に示すことができた。
- ・市外（主に名古屋方面）から初めて足助に足を運んだ人や足助ゴエンナーレを目的に来た人たちも多く、それらの人たちに足助の町並みの魅力の一端を伝えるきっかけとなった。
- ・和菓子等関連商品の販売などで、小規模ながら、建造物の管理活用事業を地域の経済活動につなげることができた。
- ・作家やスタッフ等の SNS による活動の情報発信が、足助への来訪者を誘引した大きな要素となった。
- ・入場料を設定しての内部公開について、入場者数が得られるか不安があったが、予想以上の入場者数があった。来場者の満足度も高く、催事の内容によっては寿々家においても利用に対する料金設定が可能であることが実証された。
- ・建造物を活用する際に独自の価値観を提供することにより、商品開発等につなげられる可能性を得られた。

②「中馬のおひなさん」展示

i 実施期間：2 月 7 日（土）～3 月 8 日（日）、内部公開は期間中の土・日・祝日のみ（11 日間）

ii 展示内容：寿々家本館の各部屋に、SNS 等により募集して地域の方から寄付をいただいた雛飾り（8 式）や、足助観光協会から預かった大規模な雛飾り（1 式）を展示した。内部公開の際には、管理人が展示物の監視と来場者の案内を実施

iii 効果等

- ・内部公開日には 1 日平均 100 名余の入場者があった（2 月 7 日～3 月 1 日）。
- ・建物の内と外が入り混じる寿々家独特の雰囲気が写真愛好家に好評であった。
- ・地域の観光行事と連携した行事で入場料が無料であれば、特に宣伝しなくても一定数の来場者数を見込めることがわかった。

5 事業実施後の課題

(1) 予期せぬ修繕費用の増加

寿々家は本格的な修理ではなく対処修繕により建物を維持しているためその傾向が顕著なのかもしれないが、多くの人の利用により床が沈んだり、少し弱くなっていた部分の傷みが増したりした。公開に際して来場者の安全対策を行うことは当然だが、事後の修繕も見込む必要がある。

(2) 施設の不備解消について

寿々家では、給排水設備の手入れが未着手であるため、現状ではトイレの使用もできない。これらの施設の不備の解消は、公開活用に当たっての大きな課題である。現在清掃等の管理では近所の水道や鍋等に溜めた雨水を使用し、トイレは近在の公衆トイレを利用させていただいている。

(3) 建物公開時の管理体制について

観光行事や催事開催時には多くの来場者があるため、一人の管理人では対処が難しい場合もあった。また、芸術作品を展示する際には、防犯上の配慮も当然必要となる。常駐（居住）の管理人が日常管理を行い、公開時に臨時の管理人を雇うことが理想的であるが、現状ではその体制は難しい。

(4) 建物公開の頻度について

地域の人たちに対して文化財建造物への親しみや活用方法について提案する場合は、週に1~2回程度の日常管理の範囲内で定期的な公開が、より広く情報発信するためには、催事等期間を区切った年2~4回程度の特別公開を継続（管理の都合と調整必要）することが、効果的と思われる。

(5) 管理活用に要する経費等について

入場料や貸館等による建造物単体、また管理主体単体で稼ぎをつくり出すことは難しい。関連する商品開発や広告等他の媒体等、外郭での稼ぎをいかに作り出すかが課題であり、文化財建造物の持つ魅力をいかに演出し、外部主体とどのように連携するかが重要となる。

6 今後の展開

(1) 活動の面白さの演出

寿々家の継続的な修繕整備と、文化財建造物の活用によるまちづくり新たな面白さの創出を図る。

(2) 点から線への展開

寿々家に隣接する地藏堂庫裏の管理を受託したにより、庫裏の寿々家別館としての利用と、地藏小路を一带とする管理活用策の企画が可能となったため、点から線への活動の展開を図る。

(3) 活用促進の手段として

寿々家における建造物の新しい使い方の提案の効果が明確にし、また行政と民間の中間的な位置にある非営利団体が空き家を活用する事例を示すことにより、空き家の貸し出しや他者に管理を任せることに消極的な所有者等に対して、建物活用に対する前向きな姿勢を引き出す手段とする。

(4) 「まちの縁側」として

地元商店と連携したお土産の企画開発等を進め、既存の観光地との関係を深めつつ新たな稼ぎの仕組みを企画するなど、ヒト・モノ・コトが交流する「まちの縁側」の機能を進化させる。

7 その他（文化財の管理活用に関する提案・新たな発見など、自由に）

- ・文化財建造物の管理活用の継続のためには、文化財となった価値を担保にして、さらにヒト・モノ・コトを絡めて動かし、活用の面白さという価値の付加・共有が大切と考える。
- ・活動の継続には協力者の増加と資金の調達が必要となる。協力者については各方面との連携強化に努める。資金調達については、自己資金の確保手段とそれまでのつなぎの制度の活用を模索する。